今私が伝えたい思い

語り部ガイド　気仙沼市立階上中学校２年

幼稚園から戻り、祖父母の家で、一つ上の姉とテレビを見ていた時、「ドドド……」と、大きな地鳴りと揺れが私たちを襲った。幼稚園で避難訓練をしていたから、すぐ机の下に隠れることまではできた。揺れは収まるどころか益々大きくなる。祖母は、机の下に隠れていた私たちを抱え、庭に連れ出した。間もなく、大きな津波が襲ってきた。そこまでが私の記憶に残っている。

私は幼く、何が起こっているか分からなかったのか、あたふたと混乱していたそうだ。その日は、夜遅くまで車で過ごしたが、姉と私は、お腹がすいたなどと不平は言わなかったと後で聞かされた。幼い私たちでも、何かしら怖さを感じていたのかもしれない。

このように、記憶がはっきりしない私が、なぜ語り部を始めたかというと、祖父が市の震災遺構・伝承館で語り部として活動していたので、地元中学生の語り部を募集する案内に興味を持ったからだ。

そこで、来館者に、どうすれば地震と津波の恐ろしさを分かりやすく伝えられるか、順序立てて説明できるように地域の歴史を勉強した。

階上という地域は、何度も津波に襲われている。岩井崎に言い伝えられる拝天岩の物語、そこに書かれてあった平安時代の貞観地震、江戸時代、明治２９年、昭和８年、チリ地震の津波等々…。それにもかかわらず、なぜ今回の震災でこれほどの犠牲者が出てしまったのか。津波の災害は、その間隔が数十年、数百年単位であり、その記憶、経験が風化すれば、また同じことが繰り返されてしまう。学び続ける中で、風化させないこと、そして、語り伝えていくことの大切さを知った。

しかし、語り部をしていく中で、気付いたことがある。それは、伝えることの難しさだ。伝えたい思いがうまく伝えられない。津波の記憶、被災の経験、学んだ歴史をうまく言葉にできず、伝えたいという、その思いばかりが空回りしているようで、もどかしさを覚えていた。

それは、祖父や他の語り部の方々もそうなのだろうか。そう考えたとき、私は気付いた。うまく伝わらないからこそ、語り伝えること、伝え続けることが大切なのだと。私が祖父を見て語り部を始めたように、語り伝える私たちの活動そのものを、津波を知らない人々に、そして、後世に伝え続けることが大切なのだと。

以上が、語り部を続ける中で、私が今伝えたい思いである。